談話室

新政権への期待

柴生田　晴四
（経済倶楽部理事長）

▼9月16日に菅政権が発足しました。自民党の両院議員総会で行われた総裁選挙で安倍政権の継承を掲げて圧勝した菅氏について、多くのメディアは、理念に欠けるとか、ビジョンが見えないといった見出しで批判を投げかけました。しかし、果たしてそういう形で揶揄することが適切であるかどうか疑問です。

▼自民党総裁に選出された後の記者会見で菅氏は、縦割り行政、既得権益、悪しき前例主義を打破して規制改革を進めると宣言しました。アベノミクスが結局は短期のカンフル剤である金融財政政策に寄りかかり、第三の矢として掲げた成長戦略が実を結ばなかったのは、新たな成長機会を生み出す規制改革が中途半端に終わったためです。塩田潮さんによれば、菅氏が安倍さんを支えたのは、彼が改革派だからという理由でした。であるなら規制改革はまさに安倍政権が積み残してきた政策だと言えるでしょう。理想や理念ではなく、今何をしなければならないかを明確に打ち出すことを優先されたのです。

▼その意味で派閥均衡と揶揄された新内閣の布陣においても、「改革意欲のある人を起用する」とした菅首相の意図は明白に貫かれています。何といっても、その目玉は河野太郎行革担当相でしょう。河野氏は初めての入閣が行革担当でした。縦割り行政の弊害を打破するために現場の官僚にどう働きかければよいかについても、当倶楽部の講演会にお招きした時にも、その具体的な事例を詳しく語っておられました。首相の示唆した「縦割り110番」をその日のうちに立ちあげるなど、行動力と発信力においてまさに新政権の推進力として機能するのではないでしょうか。

▼そしてもう一人の目玉が平井卓也デジタル担当相です。菅氏の打ち上げた「デジタル庁」は、すでに「骨太の方針」にも盛り込まれていたものですが、実際には実効性のある政策に結び付けられずに終った「方針」は枚挙にいとまがありません。その意味でスピード感のある果断な実行ができるかどうか、平井氏の手腕が新内閣の試金石になります。

▼菅氏は総裁選に際して「自助、共助、公助」という考えを打ち出しています。立憲民主党の枝野幸男代表は「自助が第一に出てくる新自由主義的」と批判しましたが、国民の多くは好意的に受け止めているようです。福沢諭吉の「天は自ら助くる者を助く」や、J・F・ケネディの就任演説の「国があなたのために何ができるかを問うのではなく、あなたがあなたの国のために何ができるのかを問うてほしい」にも通じるものです。苦学生からの叩き上げで非世襲、無派閥の宰相に上りつめた菅氏ならではの信条といえるでしょう。